

おおいた豊後大野ジオパークにおける伝説と水害

吉岡敏和*・おおいた豊後大野ジオパークガイド（*おおいた豊後大野ジオパーク推進協議会）

おおいた豊後大野ジオパークには数多くの伝説が伝えられているが、そのうちのいくつかは、水害や河川の流れといった自然現象を表現したものであることが示唆される。これらのうち、ここでは「水霊石」と「緒環伝説」について紹介する。

みずたまいし 【水霊石】

おおいた豊後大野ジオパークのサイトの1つである「菅尾磨崖仏」の参道脇の斜面に、「水霊石」と呼ばれる巨石が存在する。地元で伝わる伝説では、「この石が動くと、宇対瀬（うたいぜ）地区（菅尾磨崖仏下の集落）は洪水に襲われ泥水に埋もれる。」とされている。

この石は阿蘇4火砕流堆積物の弱溶結凝灰岩で、石の周辺の地層はその下位の阿蘇3火砕流堆積物であることから、この石は明らかに斜面上部から落下してきたものである。また、宇対瀬地区は大野川の最低位段丘に立地し、大野川の氾濫のたびに浸水の被害に見舞われていた。おそらく、この石が斜面上部から落下した際にも、大雨により大野川が氾濫し、宇対瀬地区も洪水に見舞われたものと考えられる。この伝説は、この石が動くような大雨の際には洪水に警戒が必要だという戒めを伝えるものと言える。

おだまき 【緒環伝説】

この伝説は平家物語の巻第八の三に記されていることでも有名な伝説である。

豊後国の山里に住む娘の元に毎夜通う男がおり、ある日その男の正体を知るために、男の襟に赤い糸を刺し、男が帰った後にその糸をたどると、姥岳（今の祖母山）の麓の岩穴に繋がっていた。娘が穴を覗くと、そこには首に針が刺さった大蛇が横たわっていたという。

娘はやがて男子を出産した。やがてその子は元気に成長し、武勇に優れたたくましい男になった。そして、その子の5代後の子孫が、「恐ろしき者の末裔なり」と言われ、源平の合戦でも活躍した緒方三郎惟栄（これよし）と言われている。

娘は宇田姫と呼ばれ、おおいた豊後大野ジオパーク内の宇田姫社はその屋敷跡と伝えられている。また緒方三郎惟栄は、周辺の広い範囲に荘園を持っていたと言われ（緒方荘）、ジオパーク内にもさまざまな伝説や言い伝えが残されている。

ところで、伝説における大蛇や龍は、しばしば川の流れを表していると言われており、大蛇や龍を退治するという神話や伝説は、川の治水を意味していることが多いとされている。そのように考えると、大蛇が住んでいたと伝えられる竹田市の穴森神社の岩穴は、緒方荘一帯を潤す緒方川の源流部にあたり、緒方三郎惟栄の祖先が大蛇であったということは、惟栄が川の水を支配することによって、この地を治めることができたことを示しているとも言え、非常に興味深い。



おおいた豊後大野ジオパークと伝説関連地の位置
（地理院地図色別標高図を使用）



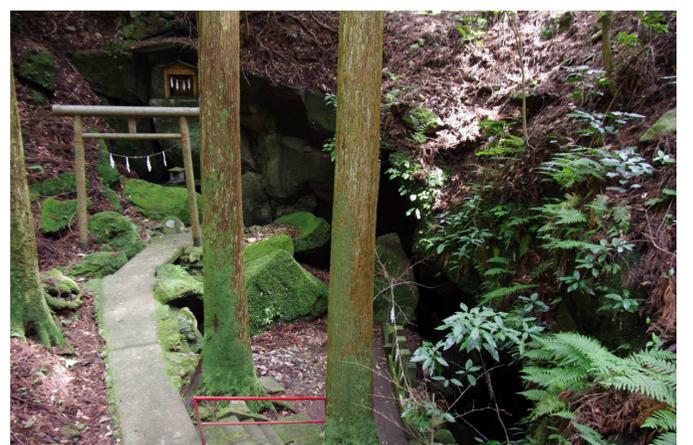
水霊石



水霊石周辺の地質図
（産総研 1/5 万地質図「犬飼」）



宇田姫社



穴森神社の岩穴